
電腦少女の破天荒

亥月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電腦少女の破天荒

【Nコード】

N5622G

【作者名】

亥月

【あらすじ】

国家権力の一にも値する超機密的プログラム、「緋月南兎」。普通の男子高校生、清家尋春は自分のパソコンをそのプログラムに乗っ取られてしまった。「電腦意思」を持つ「彼女」や、「彼女」を狙う危ない連中に振り回される少年の物語。

Prologue .

「コーヒーでもいかがです？」

薄暗い室内。

冷たく、錆くさいような金属の匂いと、コピー機のインクの生温かい匂いが^な絢い交ぜになったその部屋の中で、重厚な質感の革のソファに深々と腰かけた男に、少女は声をかけた。少し首を傾げると亜麻色に艶めく、幾本もののピンで留め上げた左に分けた前髪とは対照的に、残った右の髪がさらさらと額にかかる。大河の水が深みに集まって、透明でありながらも暗い色彩に掠れたような、果ての無い程に微妙な翠眼が微かに動いて、楕円形の無表情の盾を張り巡らせた、疲れたような背中を見つめた。

「いない。下がっててくれ」

男は左手を上げたまま、簡潔な声で少女に応答した。肩の高さで切り揃えた、柔らかな亜麻色の髪を揺らして、少女は黒いデザートブーツを履いた足で部屋を出ていった。足音は無い。重く、湿度の高い静寂が部屋全体にのしかかり、それは男にしか聞こえない軋むような悲鳴を上げていた。

「……つくるべきではなかったのか」

ぼつりと、男は呟いた。静寂は声を呑み込み、響きを振動の無い世界へと同調させていく。それでも、消せはしなかった。僅かに、ごく僅かに、冷たいリノリウムの床を慎重に這う音。生命の媒介が、古代の水の中でもがく、それにしては規則的で単調な音。

男は立ち上がった。靴の裏と床が擦れ合って、高いヒステリック

な音を立てる。それに構う事も無く、男は何の感情もこもらない機械的な足取りで、音を立てるものの方へと歩み寄った。

それは、厚い、黒のベロア生地が無愛想なカーテンに包まれていた。隙間から、透き通った薄い青竹色の光が、陰気な影がへばりつく床に一条の光となつて零れ落ちている。男は手を伸ばした。どの爪も、両角が尖った不器用で整然とした形になっている。その手はカーテンを掴み、一条の光は、不規則に揺れ動いた。

「君には……何故か、君に対して抱くべきである念を抱くことができない」

滑らかな音が部屋に響き、すぐに呑みこまれた。生命の音は、一粒一粒の音の滴を、リノリウムの白い床に落とした。それは跳ねて落ちた。

「何も、だ」

青竹色の古代の水に包まれて、少女は眠っていた。自らを動かす脳を失った彼女という存在は、かつて古代の生命が息づいた水の中に、生まれたままの姿で閉じ込められていた。華奢な肢体は、神々しい程の光に照らされて白く、白金のように輝いている。燃え立つような紅蓮の髪は古代の水に弄ばれて、静かに揺れていた。起伏の少ない、けれども稚拙美を感じさせる幼い身体は、司令部を永久に失って虚しく、その美しいかたちを留め続けていた。

「先生？ 完成しましたよ」

ふと、後ろから声が響いた。その声も、部屋を支配する静寂に吞

みこまれる。男はゆつくりと、垢に塗れ輝きを失ったような瞳で、肩越しに振り向いた。亜麻色の髪の少女が閉めて出ていった扉は、音も無く開け放たれて、戸口にはグレイグリーンのレイバンのサングラスをかけた若い男が、姿勢良く立っていた。長身痩躯のスタイルシユな身体を、イヴ・サンローランのスーツに包んだその男は、ずっと流れるような赤茶色の眉をぴくりと動かした。

「ニードルか」

「コードネームにはあまり馴れないもんで。ニードルと呼んで下さい」
「そうか」

男は、低い声でそう言うと、ニードルの方を向いた。眉と同じ赤茶けた前髪の下、サングラスの奥に潜んだ彼の瞳がきろりと動く。

「……あれはできたか」

「ええ。現代医療の最先端に行く我々の持ちえる技術を、全て注ぎ込みました。最高傑作といえるべき代物です」

「……楽しみだな」

男は、低く、相変わらず感情のこもらない硬い声で呟いた。部屋を照らす、青竹色の光に背を向けたまま、男は戸口へと向かっていく。ニードルはひよい、と眉を上げるとにつと笑って、部屋の外へと出ていった。亜麻色の髪の少女とは違い、足音は大きく響く。

「フィオがコーヒーを淹れて待ってますよ」
「ああ」

男は、また、肩越しに振り向いた。脳を失った少女は、未だに古代の水の中でもがき続けている。美しくも儚い、幻想的なその存在は、ギリシャ神話に出てきそうな若い女神のようだった。

「君に、
神の恩寵を」
ガラシヤ

Prologue・(後書き)

更新が遅れるかもしれませんが、何とぞ、よろしく願います。

Episode : 1 パソコンの消失

「なあ……俺のパソコンは？」

「ん〜？ 尋春のパソコン？ 知らないよ母さん」

午後八時。

自分を母さんと称したその女性は、飴色に光る木製のシーリングファンが回転する、高い天井を見上げたまま、尋春の問いかけに応答した。大きくくりくりとした藍色の瞳が踊る、純白の磁器のような、小さくてつくりのいい顔は子どものようで、彼女の淡い桜色がかった金髪を留め上げる、大人っぽいアンティーク風の蝶のコンコルドピンとコントラストをなすようだった。尋春は、母親である彼女——あいら藍理と同じ色の瞳を怪訝そうに動かすと、テーブルに置かれたマグカップに手を伸ばして、口をつけた。

「まずっ！ てか甘っ！」

「そりゃそーでしょー。大体それ母さんのよ」

だんっ！ とカップをテーブルに叩きつけるようにして置くと、尋春は思いつきり藍理を睨んだ。母さん知らない、とひよいと髪と同じ色の眉を上げて、相変わらずシーリングファンを見つめ続ける藍理を放って、尋春はポケットに手をつ込んだまま、部屋を出て行った。

「父さんもズルイのよー。あたしだけ嫌われ者にされてもねー」

藍理は単調な声でそう言うと、ひよいとアイボリーの革張りのソファから立ち上がって、またひよいと屈んだ。ふう、と一息つき、藍理は薄いアイスグリーンのブラウスの袖をたくし上げて、ソファ

の下に手を突っ込んだ。しばらく、息子と同じ色の藍色の瞳を、新しいおもちゃを動かす子猫のようにきろきろと動かしながら、ソファの下をまさぐる手に、硬い感触が伝わった。おう、と小さい声を立てて、藍理はそれを引っ張り出した。

「あつたあつた」

ずるずる、とワックスの綺麗にかかったフローリングの床から、淡い若草色のふかふかとしたラグの上に引きずり出されたそれは、茶色い段ボールに包まれていた。藍理は無表情のまま、ばりばりと音を立ててガムテープを引き剥がし始める。

「もー……あたしは父さんと尋^{ひろ}の媒体じゃないんだからねー」

ぶつぶつと呟きながら、段ボールから引っ張り出したものを藍理は、先ほど尋春に叩きつけられた林檎色のマグカップの隣に、そつと置いた。

「……ま、いいや。母さん、娘欲しかったし？」

テーブルに置かれたのは、薄いフォルムをした、真っ白なノートパソコンだった。

「……何でこんなところなんだよ」

午前二時。

就寝中に喉が渴いて、リビングまで降りてきていた尋春は寝起きの頭で、現在の状況を整理していた。二週間近く前から探していた

自分のノートパソコンが、リビングのテーブルに置かれている事。何故か、電源がついて立ち上がっている事。先程からマウスを動かしてもキーを打っても、何の反応も無い事。

何の反応も無い自分のノートパソコンを、腕組みしたまま見つめ続ける尋春は、しばらく頭の中で状況整理を続けていた。藍色の瞳が細まって、じっと発光するディスプレイを睨む。

（ん〜？ 尋春のパソコン？ 知らないよ母さん）

監理の言葉を思い返すと、尋春はあからさまに不機嫌そうな表情になった。自分の母親が、嘘をつく人と目線を合わせずに、天井のシーリングファンを見上げる癖があったのを思い出したのだった。子どもの頃から知っていた母親の癖を思い出す事ができずに、尋春は自嘲の溜め息をついた。

「それにしても……何で動かねーんだ？」

そう呟いて、尋春はエンターキーを押した。

「うるっさいなー、もうー!!」

いきなり高い声がリビング中に響き渡って、尋春は度肝を抜かれた。発光していたディスプレイがブラックアウトし、とぎれとぎれに機械音が唸る。ディスプレイの発光のみが、唯一の明かりであっ

たりビングは一瞬にして真っ暗になり、尋春は慌てて壁のスイッチを押した。太い梁に設置された、円状の蛍光灯達が白い光を発光し始める。

蛍光灯の白い光に照らされたノートパソコンの方に、尋春はおそるおそる近づいた。ディスプレイはブラックアウトから立ち直り、機能し始めてこそいるようだが。

「夜中に何なの？ キー押したりマウス動かしたり……鬱陶しいっ
たらない！」

ディスプレイには、青竹色の髪をした少女が髪と同じ色の細い眉をしかめて、こっちを睨みつけていた。

Episode : 2 「電腦少女」

「……………何よ、その顔」

細く、形の整った眉をしかめたまま、ディスプレイに映った少女は尋春を睨みつけた。目尻が少し吊り上がった三白眼の瞳は、右眼は銀色、左眼が瑠璃色と異なった輝きを放っている。それぞれ異なる色に彩られた二つの瞳が踊る、丹念につくられた西洋の人形のような小さな顔は、とても可愛らしい。真っ白な陶器の肌は、触れれば吸いつくような瑞々しさに満ちている。

艶やかな青竹色に光る、やや長いセミロングの左サイドを耳にかけて、紺色に光るピンで左の前髪を留め上げた、どこまでもアシンメトリーなその少女が映ったディスプレイに、尋春は驚きに眼を開いた。自分は、悪い夢でも見ているのだろうか？

「っていうか……………まさかあんな訳？ あたしの持ち主って」

「……………どういう意味だ？」

尋春は驚いたまま、テーブルに手をついてじっとディスプレイを見据えて呟いた。と、少女は、ええ？ と素っ頓狂な声を上げた。色彩が異なる両の瞳が大きく見開いて、淡いローズピンクのルージユを引いたような、ふつくらとした唇が何か言いたげに動く。どんなさりげない動作でも、絵になる子だった。

「あんだ、まさかあたしを知らないの？ あたしが組み込まれてるノートパソコンの持ち主でしょ？」

「最近、行方不明だったんだよ。今ここで感動の再会だ」

「冗談でしょ？」

感動どころじゃねーけどな、と尋春が付け加えると、あからさまに困惑したように少女は唇に、軽く握った右手を当てた。何か思案するように俯くと、さらさらと透き通るような前髪が額にかかる。不安げに翳る虹彩異色症の瞳が揺れるのが、分かる。

「まあ……とにかく、お前誰だよ？ 頭がイカれた奴等が造った、性質の悪いコンピュータウイルスみてーなもんか？」

「イカれた奴等の造ったコンピュータウイルス？」

無愛想な尋春の言葉に、俯いた少女の青竹色の髪がかかった、綺麗な弧を描く眉がぴくりと動いた。瞳に映り込んでいた翳はさっと消え失せ、伏せていた顔がぱっと上がる。気品のある、つくりものでありながらも、何処か確かな意思を感じさせる西洋の人形のような顔は、とてつもなく低俗な言葉をかけられたように忌々しげに歪んでいた。それぞれが異なる色を持つ三角形の瞳が、ぎつと鋭利な眼光を放つ。

尋春は嫌な予感がして、ひくつと痙攣したように口角を上げた。

「そんじよそこの、下劣で低性能のウイルスと一緒にしないでくれる？ あたしは日本の誇る天才プログラマーに造られた、国家権力の一にも値するぐらいの、高性能プログラムなんだから！」

「……んで、何で国家権力の一にも値する程のプログラムが、俺のパソコンにインストールされてんだ？」

「プログラムなんて総称的な呼び方よしてくれろ？ あたしには緋月南兎っていう、れっきとした名前があるんだから！」

「プログラムを自称したのはそっちだろ……」

そう言って尋春は、ジャージのポケットに右手を突っ込んだまま溜め息をついた。少女——南兎も鼻を鳴らして、ふいつと横を向いた。青竹色の髪が揺れて、右サイドの髪が華奢な肩に触れる。吹

き出物一つ無い、すべすべとした真っ白い頬は興奮で紅潮して、色づき始めた桃の実のようだった。

「何いゝ？ うるっさいなあゝ夜中に」

ふと、ぱたぱたとスリッパを履いた足音が聞こえて、片方ずつに薄いブルーの磨りガラスが二枚嵌めこまれた、観音開きのリビングの扉が開いた。柔らかな生地、裾が優雅に猶予^{たゆた}うミッドナイトブルーのネグリジェに、濃いマドンナブルーのナイトガウンを羽織った監理が、寝ぼけ眼を擦りながら尋春の方を向いた。相変わらず、青が似合う女性である。微かに濡れている、桜色がかった金髪が背中^{さなか}に流れて、宛ら光り輝く大河のようになっていた。

「尋ぐ、もう寝なよ。母さんうるっさくて起きちゃったじゃ……」

監理はそこまで言うと、はたと喋るのをやめて、テーブルの上のノートパソコンに視線を移した。途端に、眠たげだった藍色の瞳にぱつと光が差す。

「おお！ これがあの人^の造ったプログラムちゃんね！ かーわいいっ！」

「……はあ？」

ほー、と感嘆の声を上げながら、ノートパソコンの両側に手をつき、ディスプレイに映った南兎を見つめる監理。南兎も少し驚いたように仰け反って、まじまじと、子どものような瞳で自分を見つめる監理に驚いたように、対を成さない色の瞳を僅かに見開いた。

「あなた……あたしを知ってるの？」

「えーえ、知ってますよ。あなたが生まれる前からね」

にっこり笑ってそう言う藍理に、尋春は、は？ と声を上げた。

「ありゃ、そーい、いたんだっただね、尋。何が、は？ なの」

「何で……こいつを知ってたんだ？」

「えー……それはねえ」

藍理はくるりと振り返って、手品の種明かしをする子どもものようにもったいぶると、くすりと笑った。藍色の瞳がくるりと動いて、星の消えた夜空のように澄み渡る。

「父さんの造った超機密的プログラム。この娘この存在を知ってるのは、日本の一部の人間のみ。世界最高水準のハッキングシステムに、対抗しうるアンチウイルスソフトウェアも開発されてない、コンピュータウイルスも持つてる。あまり構ってやれてなかったからかな……、父さんからあなたへのプレゼントよ」

Episode:2 「電腦少女」(後書き)

伏線にチャレンジしていますが、難しい；

Episode : 3 神の恩寵

「……」

土曜、午前八時。

黒くて冷たいスチールパイプのベッドの上で、尋春は緩慢な動作で、上半身を起こした。軽い頭痛を感じて左手でこめかみを抑えたまま、モノクロの、レトロなデザインの時計が示す時刻を確認すると、そのままゆっくりとベッドから降りた。時計の秒針が、やけに大きく音を立てて時を細かに刻んでいる。

「……変な夢だったな」

ただでさえ低血圧で朝が弱い尋春のテンションは、昨晚の夢のせいで、がた落ちだった。最低ラインすれすれを上回り、うだうだと平行線を辿る自らのテンションを自覚しながらぼつりと独りごち、がりがりと頭を掻きながら部屋を出る。二階は静まりかえり、廊下の突き当たりの藍理の部屋のドアは開けっ放しにされ、薄いグレー地のネイビーブルーのオルタネート・ストライプのシャツがかかったダブルのベッドが見えていた。柔らかなスカイブルーの毛布が、人が抜け出た痕跡を残している。

「……ちゃんと閉めるよ」

藍理の部屋の扉を閉め、磨きこまれた木の階段を足音を立てずに降りると、尋春は洗面所に向かった。小さくテレビの音が聞こえてくる。その音を聞いて、尋春は微かに眉を動かした。自分と同じくして朝が弱い藍理は、休日の朝は九時以降でないと起きてこない。何故、藍理が起きているのか。その事について思考を巡らせなが

ら、尋春は洗面所のスライド式の扉に手をかけた。

藍理の早起きの理由が、洗面所を開けた途端に発覚した。

「へ」

洗面台の前に少女が立っていた。線の細い真つ白な身体が、白地に赤と黒の線が走ったタッタソール・チェックのバスタオルに隠れて、濡れて色濃く、鮮やかになった青竹色のセミロングの毛先からはぼたぼたと滴が垂れている。タオルを抑える手は若木の如くしなやかで細く、胸の膨らみが生地ごしに確認できた。

東向きの窓から差し込む朝の光に照らされたその姿は、肌の白さも手伝って、輝くような美しさだった。

「…………ぎゃあああ——！！」

「ごめんねー。尋がこんな早起きすると思ってなかったのー」
「ごめんねー、じゃねーよ！」

リビング。

ソファに座って、血が滲んだティッシュで鼻を押さえたまま、尋春は藍理を睨んだ。藍理はあはは、と笑いながらシツクなエバークリーンのカフェエプロンを外して、すべすべの肌に零れ落ちた絹糸の房のような、淡い桜色がかった金髪を耳に引っかけた。藍色の瞳

が、面白いものでも見るかのようにきょろりと動く。

「まだ出てるの〜？ ホント硬派だな、普通の男子高校生ならぐつとくるもんだよ〜？」

「うるせえな……大体」

尋春は血の滲んだティッシュをダストボックスに投げ入れると、新しいティッシュで鼻を押さえながら眉を怪訝そうにしかめた。それと同時に、リビングの観音開きの扉に嵌めこまれたブルーの磨りガラスに人影が映って、ゆっくりと開く。

「何でこいつが三次元にいるんだよ!？」

リビングに入ってきたのは、モノクロのアーガイルチェックのチユニックに着替えた南兎だった。つくりのいい顔にむっとした表情を浮かべて、虹彩異色症オッドアイの瞳がじろりと尋春を睨む。青竹色の髪は完全に乾いて、夜中、ディスプレイに映っていた時と同じようにアシメトリリーな髪形にセットされていた。

「ま、先ご飯食べよ。食べながら説明するからさっ。……勿論、鼻血止まってからネ」

「んー……まずは、っと」

ホットサンドの端っこを啜えたまま、藍理は茶色いゴムで髪を纏めると、冷蔵庫から牛乳パックを取り出して細長いグラスに注ぎ始めた。南兎はちょこん、とソファに座って、黒いタイツを履いた細い足をラグの上に投げ出し、ライトブルーに光る、四角いフォルム

の大きなヘッドフォンから流れる音楽に耳を澄ましている。ちらりと南兎の方を向いた後、尋春は湯気の立つコーヒーを啜りながら、藍理の方に視線を変えた。

「南兎ちゃんのプログラムとしての存在は、夜に説明したでしょ？
父さんが造った、日本でも一部の人間しか存在を知らない、超機密的プログラム」

「ああ」

グラスをテーブルに置いて引いた椅子に腰かけると、両の色が異なる瞳をまん丸にして、レビに釘付けになっている南兎に目を向けて、グラスの縁に珊瑚色の唇をつけて牛乳を飲みながら瞳を閉じた。

「あー……ま、何年か前の話にんだけど」

「？ 何だよ」

藍理はグラスから唇を離すと手の甲で牛乳を拭い取り、ボールペンを手に取って、テーブルに置かれたまっさらなコピー用紙に絵を描き始めた。硬質な音を立てて、黒く細い線が純白の紙の上に、意思のあるものとして刻まれていく。

「えっと……まず最初にね、南兎ちゃんが造られたのと同時に、南兎ちゃんがわたし達の世界で生きていけるように、父さん達は南兎ちゃんの身体を造ったわけ」

ボールペンの先が簡単な人の形を描き、その上に、顔の所に「父」と書かれた人間が描かれる。藍理は藍色の瞳を動かしながら絵を描いている途中、尋春は南兎の方を向いた。虹彩異色症オッドアイの瞳は宙を見つめるようにぼんやりとしている。どうやら、音楽しか聴こえていないようだった。聞いている？ と紙を見つめたままの藍理の言葉に、

尋春は目線を戻した。

「世界各国の上層部や怖い人に知れたら、後々面倒な事になるからねー。日本中の優秀な医師達を集めて、秘密裏に造ったんだってさ。そうやって造られた南兎ちゃんの場合は、ガラシヤって名前をつけられたの、ギリシヤ語で神の恩寵って意味よ」

「日本にそんな技術力あんのか……？」

「今西暦何年だと思ってるのー？ 日本の医療技術は元々水準高かったし、日進月歩で進化してんだから」

藍色の瞳を紙にだけ集中させて、冷たく光るペン先をその上で踊らせながら牛乳を口に含むと、藍理は顔を上げてペンをノックし、ペン先を収納した。

頭の中に丸を描き加えられた、人の形を象った線の隣にはCDのような円盤が描かれ、そのCDと丸を繋ぐように細いホースが描かれている。上の、「父」と内部に書かれた丸の周りに、人間の集団を表わしているのだろうか、大きな丸の中に小さな丸がたくさん描かれていた。多分、父に協力し、「ガラシヤ」を造った医師達なのだろう。

藍理はこんなもんかね、と呟くと、新しいホットサンドに手を伸ばした。

「ガラシヤには^{サイバーブレン}でいう、人間でいうと脳にあたるものも、ちゃん^{でんのういし}とあるの。元々、南兎ちゃんは^{サイバーブレン}でいうと脳意思を組み込まれたプログラムだし、その脳意思がこの^{サイバーブレン}の脳に移る事で……」

そこまで言う^とと藍理は横を向いて、音楽に聴き耽っている南兎に目を向けた。

「こーやって、三次元で活動する事ができるという訳です」

説明を終え、ホットサンドの端っこをかじり始めた藍理に、尋春は疑問の目を向けた。言っている事と、今現在起こっている事は噛み合っているものの……。

いまいち、実感が湧かない。

「……何でそんな詳しいとこまで知ってんだ」

「そういえば何でかしらね……けど、全部現実の事だし」

半分までホットサンドを食べると、藍理は牛乳のグラスを手にとって、一気に飲み干した。かつん、と音を立ててグラスがテーブルに置かれ、少しだけ残った牛乳が、重力に従順に、滑らかな表面を伝っていく。

「母さんは、女の子と一緒に暮らせて楽しいからいいけどっ」

「……は？」

Episode : 4 A u r e v o i r

「……Beau / C e c o r p s」

冷たく重量感のある手術台の上に置かれた、滅菌されたミントグリーンのビニールシートの上の少女の身体に、亜麻色の髪の少女――フィオは、手術用の手袋もせずに、寒色系のマルチ・ストライプのシャツワンピースに、サックスブルーの刺繍が入ったイーストボーイの黒いカーディガンを羽織っただけの格好で、手を触れた。大河の深みに集まった、果てしなく深い、透き通ってはいるものの暗い色彩に掠れた、微妙な色に彩られた翠眼は少しも動かない。美しく象かたちづくられた少女の身体に触れた手も、芸術家に造られた作品のように、美しくあっても意思を持たないかのように、ただ、固まっていた。

「何をしてる、フィオーレ」

低く、抑揚の無い声が響いて、フィオの首がぴくりと動いた。幾本ものピンで執念深さを感じさせる程、少しの緩みも無く留め上げられた左の前髪とは対照的な、右の前髪がさらりと揺れる。フィオがゆっくり振り向くと、のっぺりとした白に染められたスライド式の扉の横に、男が立っていた。垢に塗れ、輝きを失った瞳が、フィオの暗く掠れた翠眼を捉える。その後ろには二ールが立って、レイバンのサングラスの奥に潜む瞳を、男の疲れたような背中に向けていた。

「……モンド先生」

フィオの、暗く掠れた翠眼は、ますます深みを増した。巨大な水

流が、遙か下に沈殿した柔らかな泥を抉る^{えぐ}ように、その流れが生み出した歪^{いびつ}な水中の揺れが、そのまま映り込んだように、瞳が揺れる。

「あまり素手で触るな」

虚飾の無い、それ自体が虚そのものである男——モンドの言葉に、フィオは黙ったまま手術台から遠のいた。黒いデザートブーツを履いた足は、相変わらず音も立てない。ニールはぴくり、と赤茶けた眉を動かし、小さな足音を立てながら入室すると後ろ手にドアを閉めた。扉のスライドする音が、やけに大きく響く。

金属製の器具が多い室内は寒々しく、冷え冷えとしている。モンドは、目を閉じたままの少女の身体を眺めた。艶めく青竹色の髪、整った顔立ち、起伏の比較的激しい、首から下の身体。

「生殖機能は」

「ありません」

きつぱりとフィオが言うと、モンドはそうか、と呟いた。

「……何故、生殖機能を？」

「万一の事について、だ」

ニールの問いかけにモンドは間髪いれずに答えると、垢に塗れた瞳は身じろぎ一つせず、その完璧な身体を見据えた。その硬質な視線はじきに、顔の方へと向けられる。

^{サイバーブレン}

「電腦はどうだ」

「最高傑作です。誰が何と言おうが」

硬いフィオの声に、ニールの眉がまたぴくりと動いた。サングラ

スの奥に潜む切れ長の目が、何かを探るようにきろりと動く。モンドはゆつくりとフィオの方を向くと、疲れを宿した瞳で、暗く掠れた翠眼を見据えた。真夜中の水面は、静かに、流れる水を受け止め続けて微かに揺れている。

「……何故、そこまで言い切れる」

モンドの低い声に、フィオはぐつと手を握りしめた。翠眼は揺れを無くし、流れ込む水を拒絶するように、流れる時間を拒絶するうに、ただただ、揺れる事を拒み続けている。

「……サイバーブレン 電腦造成チームのリーダーは、とても優れた人だったから」

幼さが残る、真摯なその響きは室内中に響き渡った。モンドはしばらく、フィオの頑かたくな翠眼を見据え続けると、やがて音も無く後ろを振り返って、ニールの脇を通り抜け、部屋を出て行った。ニールも、フィオと少女の身体を交互に見ると、モンドの後を追った。リノリウムの静かな廊下に響くのは、やはりニールの足音だけだった。

静寂だけが、部屋を支配したかに思えた。

「う……」

それは、本当に微かな慟哭くうだった。

ぼたり、と感情の滴が床に落ち、丸くなって光を跳ね返す。フィオはがくりと、操り手を失った操り人形マリオネットのように床に膝をつき、獣が咆哮するように慟哭した。細い喉から溢れ出た感情の響きは、い

つまでも部屋を彷徨い続けていた。

腕が砕け、足がおかしな方向に曲がった操り人形の顔は、それでも穏やかな微笑を湛え続けて。木でできた、その動く事の無い頬に、一粒の滴が落ちた。

腕が砕け、足がおかしな方向に曲がった操り人形の顔は、それでも穏やかな微笑を湛え続けて。木でできた、その動く事の無い頬に、一粒の滴が落ちた。

夜。

バイクのテールランプが、夜を彷徨う蝶のように揺れ動く真夜中。いつまでも眠る事の無い都市を眺めて、その女は身じろぐ事もしなかった。

左の肩に流れる髪は暗闇に黒く染められ、虚ろな瞳は、硝子玉のような水色に透き通っている。遙か遠くの喧騒を見つめるその瞳に映るのは、虚そのものだった。

ベッドのサイドボードの上。エメラルドグリーンの花瓶に生けられた、白い百合の花の傍で、白衣を着た理知的な女性が、たおやかな笑みを湛えて映っている写真があった。下に子どもの頭が見える。

「A u r e v o i r , m o n U n e p e r s o n n e i m
p o r t a n t e」

E p i s o d e : 4 A u r e v o i r (後書き)

フランス語の翻訳って難しいな……；

Episode : 5 荒れ模様の外出

「もしもし？ 清家^{せいけ}ですけど」

午前十時。

藍理はコードレスの子機を耳に押し当てたまま、シーリングファンのスイッチを押した。リビングは静かで、開いた大きな窓からはそよ風が入ってきて、真つ白なレースのカーテンと、黒い蝶が所々に舞うウォーターブルーの厚い生地のカーテンを、ふわりと持ち上げる。透き通った董色の羽を広げた蝶の飾りがついた、黒いバレッタで髪を纏めた藍理は、受話器から聞こえてくる声に目を丸くした。

「アレ、もしかすると皐月^{さつき}ちゃん？」

「そーです！ 覚えてたんですね先輩」

皐月と呼ばれた、はきはきとした快活な声の主。それを聞いて、藍理は口元を綻^{ほころ}ばせた。大粒の藍色の瞳が、自らの過去を集成した、古い本のページをゆっくり破れないように捲るように、すつと細まる。桜色がかった金髪を掻き上げて、ルージュを引かなくても綺麗に艶めく唇を開いた。

「よく番号分かったねー。みんな元気？」

「ええ、騒^{さわ}がしいくらいです。それより、ガラシャはちゃんと届きましたか？」

そう皐月に聞かれて、藍理は顎を上げると、飴色に光るシーリングファンが回転する高い天井を見上げた。その姿勢のまま、ゆつくりと瞳が開く。

「うん、届いてるよ。南兎ちゃん自身、結構気に入ってるみたいだし、パソコンの中にいるよりガラシャに入ってる方が好きみたい」
「それはいいんですけど……ちよつと南兎に代わってもらえます？」
「OK、ちよつと待……」

藍理が言い終わらない内に、爽やかな空気を劈つんぱいて、南兎の悲鳴と尋春の絶叫が響いた。スライド式の扉が凄まじい勢いで閉められる音が聞こえて、その後から廊下を驀進する派手な足音が聞こえてくる。

「ごめん、また後で連絡するわ。研究室で構わないよね？」

「それじゃ、後でお願いしますっ」

そう言つて藍理が電話を切った瞬間に、ブルーの磨りガラスに人影が映つて、観音開きの扉が両側とも勢い良く開け放たれた。

「オイ……！？」

「あ、ごめん。鍵かけさせるの忘れたわ」

「今朝で何回目だと思つてんだ！」

苛立ちを隠そうともせずに、牛乳が入ったグラスをテーブルに叩きつけると、尋春は藍理を睨んだ。息子の刺々しい視線をもつとせず、藍理は椅子に座った南兎の髪をマフラータオルで拭きながら、しれつとした表情で尋春を見返す。

「シャワーの音がする事ぐらい分かるでしょー。確信犯じゃないのアンタ」

「ふざけんな。大体、何で夜に入らねーんだよテメー」

「朝の方が気持ちいいから」

藍理と同じようにしれつとした表情の南兎を見て、尋春は露骨に舌打ちした。細い足をぶらぶらさせながら、マフラータオルで髪をがしがし拭かれて、がくがくと頭を揺らされてもされるがままの南兎。

「そーそー。十一時近くになったら南兎ちゃんと買い物行つてね」
「ああ!？」

椅子に座っていた身体をがばつと起こして、尋春は声を上げた。藍理は小首を傾げて、自分の息子の方に目を向けると、不服そうに藍色の瞳を細めた。タオルの陰に隠れて、南兎の表情は読めない。

「仕方ないでしょー？ 母さん用事できちゃったんだから」

タオルドライを終えて、先に球状のゴムがついた大きなブラシで青竹色の髪を梳くしりながら、藍理は髪と同じ色の細い眉をしかめた。南兎は銀色の右眼と、瑠璃色の左眼を尋春に合わせて、怪訝そうな表情になった。尋春はかちんときて、眉間にしわを寄せた。

「いろいろ買うものだってあるしー。一人じゃ分かんないでしょー」
「……ったく」

ブラシをテーブルに置いて、透き通った重厚な質感の紫色のコームで、南兎の髪を綺麗に梳かしながら紺色に光るピンを手にした藍

理は、くるつと肩越しに自分の息子の方を見た。血が繋がり合った
藍色の瞳の目線がぶつかり合う。

「メモ書いてあるから忘れないでねー」

Episode : 6 電腦世界の「触媒」

「ここら辺の空気、ちよつと臭うわね……」

大通り。

様々なデパートや高層建造物が立ち並び、車やバスが行き交い、その端つこの歩道を歩きながら南兎は顔をしかめた。幅の狭い、小さな肩にさらさらとかかる髪を監理にハーフアップにしてもらって、歩く度に淡いアップルグリーンのリボンが揺れる。

尋春は軽いダメージ加工のジーンズのポケットに左手を突っ込んだまま、脇を通り抜けた女子高生の、安物の香水のどぎつい臭いが鼻について、肩越しに後ろを振り返った。

「何、振り返ってるの？」

「あ？ ……いや、別に」

紺色のピンで留められた左の前髪と対照的な、右の前髪を揺らし、て南兎が声をかける。銀色と瑠璃色に光る、不思議な瞳が疑わしげに尋春を見つめる。

「……んだ、その目は」

「別に」

それだけ言うと、くるつと前を向いてすたすたと小さいコンパスで歩き出した南兎。がりがりとう頭を掻いて、尋春はその小さな背中を追った。

「うわぁ……広い」

デパート。

象牙色のつるつるのフロアを歩きながら、南兎は大きな瞳をぱちくりさせた。興味津々という風に、目線をあちこちに飛ばしながら歩く南兎を見て、尋春は苦笑いした。初めてデパートに来た子どものような南兎は、エスカレーターの前で頭上にクエスチョンマークを浮かべている。

「コレ……エスカレーター？ 画像でしか見た事ない」

「画像？」

「あたし、ネットサーフィンもできるの。おかげで、さえないノートパソコンの中でも退屈しないわ」

手すりのベルトに手を触れた南兎に、尋春はキレ気味の目線に向けた。気にする様子もなく、エスカレーターの階段を目で追う南兎は、ぴよいと階段に乗り上げた。

「あ、オイ！」

「あはは！ ホントに動いてる！ すっごい！！」

はしゃぐ南兎に、エスカレーターに乗っていた学生らしきカップルが迷惑そうな視線を向けてきた。尋春は急いでエスカレーターの階段に上がると、はしゃいで、手すりに両手で掴まったまま横を向く南兎を見て溜め息をついた。

そのままエスカレーターは上昇していき、ぴよい、と軽々とジャンプして三階に辿り着くと、南兎は嬉しそうにまた駆け出して後ろを振り向いた。

「早く早く！　ボーっと突っ立ってたらおいでくよ！」
「はしゃぐなボケ！」

尋春は叫ぶと、訝しがるように自分を見つめてくる子どもの脇を通り抜けて、ハイカットのナイキのスニーカーを履いた足で、やれやれ、とばかりに歩を進め始めた。前に行く、丈の短い葉っぱ模様の散るレース生地の下に、ふわふわのギャザーが入った淡いハニーエローのチュニック姿が、人だかりの中に見え隠れする。

ポケットに手をつ突っ込んだまま、南兎より長いコンパスを利用して追いついた尋春は、好奇心のとりことなっている南兎の隣で歩きながら、ふと目を止めた。

「……何でグラサン？」

尋春の目が捉えたのは、黒いサングラスをかけた、長身の男だった。襟がきちんと立った真っ白なシャツに、黒い細身のネクタイを締めたスーツ姿のその男は、壁に凭れかかったままじっとしている。黒いレンズの奥の目は、どこを見ているのか見当もつかない。

「何さつきからボーっとしてるの？　傍^{はた}から見て変よ」

怪訝そうな南兎の声を聞いて我に返った尋春は、何でもないと呟くと少しだけ前を歩いて立ち止まっていた南兎の方へとまた歩き出した。

藍理の声が、脳内に反芻^{はんすう}される。

（世界各国の上層部や怖い人に知れたら、後々面倒な事になるからねー）
「まさかな……」

「…………何コレ」

ファーストフード店の、ガラス張りの禁煙席の中でソファに腰かけた南兎は綺麗に整った眉をしかめた。目線が、プラスチックのトレイの上に置かれたハンバーガーの包みに注がれる。亜麻色のショートパンツから抜き出た、チョコレートブラウンのニーソックスに包まれた白くて細い足をぶらぶらさせながら、テーブルの黒い支柱をアイボリーの革ブーツの爪先で蹴った。

「どこで服やら靴やらを調達したんだか……」

「ねえ、これジュース？ どーやって飲むの？」

紙カップの蓋をじーっと見つめながら南兎が問いかけると、尋春はトレイの端に置かれた細長いストローの包みを破って、南兎からカップを受け取ると蓋の穴に突き刺して、無言ですっと差し出した。

「大気圧を利用したやつ？ ストローだったっけ」

「なんでも難しく考える奴だな、お前」

「実際そうじゃない。何か文句でも？」

ストローの刺さったカップに目をやったまま、南兎が気取った声で言い返すと、「あー、そうですか」と尋春は気だるげに呟いてハンバーガーの包みを手に取った。

「三次元って不思議だよな…… 電腦世界とは全然違っ」

「電腦世界は二次元だからな……」

「次元の問題じゃないのよ。ものの感じ方だって違うし、なにより」

そこまで言った後、南兎はストローから口を離して、じっと自分の掌を見つめた。

「自分をより近くに感じる事ができるの。 電脳世界の中では、自らを感じるための反応の正触媒っていうのがないから。触媒があったとしても、それは負触媒だけだと思うわ」

「言ってる意味が分かんねーな？」

「ま、事のつまりは……」

虹彩異色症の瞳が、意味ありげにきろりと動く。

「自分を見失わないで済む、って事かもね」

南兎はそれだけ言うと、チーズバーガーの包みを破いて、パンズとチーズの端っこをかじった。

Episode : 7 天邪鬼の動向

「やれやれ、すっかり遅くなったわね」

南兎はそう言うと、さつと青竹色の髪を揺らして後ろを振り向き、怪訝そうに尋春を睨んだ。銀色の右眼と、瑠璃色の左眼がぐりりと回って、大袈裟に溜め息をついた。

「俺のせいだよ」

「だってそうじゃない。あの時、あんたが渋らなきゃ、もっと早く帰れてたでしょ？」

右の前髪を揺らして、南兎は腰に片手を当てたまま、身長差の激しい尋春の顔を見上げた。ぐっと押し黙って、ばつが悪そうに尋春は顔を背ける。

一通りメモに記されたものは買い揃えたものの、最後の最後、南兎の下着を買わなければいけなくなったまではいいのだが。尋春が売り場に入るのを断固拒否し、南兎が引っ張るのも拒否した為に、遂には苛ついた南兎が尋春を張り飛ばしたりと、はた迷惑な大騒動を繰り広げたのである。

一応、店員が收拾をつけて、その店員に手伝ってもらって全てを揃えた後。

帰り際でも二人は、お互いに反発し合ったままだった。

「あんなトコ入れって言う方がおかしいだろ！」

「だからって、普通あたし一人で行かせる！？ サイズも分かんないのに、できるワケないでしょ！」

「じゃあ俺が測れってか！？ バ力かお前、性別間違えてプログラムにインプットされたんじゃないの？」

また言い合いを始めた二人に、すれ違っていく人々が怪訝そうな目線を向けてくる。ここで言い合い続けたら、永遠に家には帰れないと悟った尋春は頭を掻いて、顔を真っ赤にして怒鳴っている南兔の手をぐいっと引っ張った。

「続きは帰ってからするぞ。今は帰んねーとな」

ぶすつとした声で尋春がそう言っていると、南兔は不服そうに手を振り払った。立ち止まったまま、そっぽを向いてしまった南兔にいい加減うんざりして、尋春は彼女の二の腕を引っ掴んだ。予想以上に細く華奢で、一瞬強く握るのを戸惑う。

「いーやつ!」

尋春の手を振り解こうとする南兔はじたばた暴れて、身体をめちやくちやに動かした。それでも、がっしりと自分の腕を掴んでいる尋春の力に敵わず、ぜえぜえと荒い息を吐きながらも、南兔はその場所から動こうとしない。

尋春は仕方なく手を離して、南兔の頭に手を乗せ、目線の高さを合わせた。頬を紅潮させて、横を向いたままの南兔。

「何が不満なのか言ってみろ。言わなきゃ分かんねーんだよ、こっちは」

黙ったままの南兔は、唇を噛みしめて顔を斜めに向け、床を睨んだ。

「……連れてって」

「は?」

「ゲームセンター連れてって!」

大音量で叫ばれて、尋春は面食らった。

「素直に言えば連れてきてやったのに……」

ぶつぶつと呟きながら、尋春は興味津々といった感じで、好奇心が溢れる瞳を忙しなく動かしている南兎の後ろ姿を目で追った。ユーフォーキャッチャーがたくさん並んだ通路を、たくさんの人々とすれ違いながら、南兎は騒音を気にもせずに一つのキャッチャーの前で止まった。

中には、耳の垂れたプードルのような毛並みのウサギの縫いぐるみが置かれていて、黒や茶色の毛並みの中に、一つだけ真っ白なウサギがぽつんと残っていた。首には赤いリボンが結わえられて、垂れたリボンが艶やかに光っている。

「欲しいのか?」

何となしに聞いてみたら、南兎はぎくつと身体を弾ませた。

「別に」

そっけなく答えて、向こうの方へ進もうとする南兎。が、完全に後ろ髪を引かれている。

どこまでも、こいつがプライドが高く素直ではない事を悟った尋春は、南兎の襟首を掴んで引き寄せた。

「二百円よこせ天邪鬼」

「ただ今、帰路についた模様です」

男は低い声で物陰に隠れ、薄い携帯を耳に押し当てて誰かと喋っていた。その目線の先には、白いウサギの縫いぐるみを抱えた、不安定な足取りの少女と、それを後ろで危なっかしそうに見ている少年の姿がいる。

『動向はどうだった？』

「二回程度揉めていましたが、それ程目立った動向は見られませんでした。ひやひやしましたよ、あの少年に腕を掴まれた時にひどく暴れていましたから」

『アレの外し方を覚えられたら、少し厄介になるからな』

「ええ。ただ」

サングラスの奥の眼を動かすと、男は、青竹色の髪が揺れる後ろ姿を見送るように顔の位置を変えた。

「彼がいれば、とりあえずは問題ないかと」

E p i s o d e : 7 天邪鬼の動向（後書き）

まいどまいど、更新が滞ってすみません；

Episode : 8 波乱の予兆

「あいつは？」

いつも聞こえてくるシャワーの音が聞こえない事に気づいて、尋春は小さくなったトーストを咥えたまま藍理の方を向いた。桜色がかった金髪をポニーテールにした藍理は泡だらけのスポンジを握って、ケチャップのついた真っ白な皿を持ち上げながら答える。

「南兎ちゃん？ まだ寝てるわよ」

「高性能プログラムの機能を維持し続けるには、普通の人間より睡眠時間があるだろうな」

皮肉たつぷりに言うトーストを牛乳で口に押し込み、尋春は椅子に置いていた鞆を手にとった。

「そっか、今日月曜だったね」

「ああ、そろそろ行ってくるわ」

青い磨りガラスが嵌め込まれたリビングのドアが開いて、尋春の姿が見えなくなると同時に玄関のドアが開く音がした。

「いつてらっしゃーい」

「おはよう尋ちゃん。今日もいい御天気ネ」

「朝っぱらからウザいテンションだな。能天気」

「まあっ！　なんてお口の悪いコなの、母さん見損なったわよ」

教室に入って早々うざったい女口調を振り撒く友人、ありだ有田　修吾しゅうご
につき纏われながら尋春は席に着いた。

「ちよつと、尋ちゃん。挨拶したんだから挨拶しなさいよ。むしろ仕返しなさいよ」

「仕返しか、良い響きだな」

そのまま裏拳で修吾の顔面を殴る尋春。

「まったく手の早い男ね。父さんそっくりよっ」

修吾が裏拳の直撃した鼻を押さえながら軽く憤慨する。それでもしれっとした表情で机の中に入れていた文庫本を眼鏡ケースと一緒に引っ張り出し、読書を開始し始める尋春。

「もうっ、学校来たら読書ってインテリ気取ってんじゃないわよ」

「お前こそウザい母親キャラ気取ってんじゃないよ」

「自然体です」。気取ってません、自然体です」

徹底的にうざったさをアピールしてくる修吾に、いい加減イラついてきた尋春が文庫本を閉じて眼鏡を取ると、偶然一人の女の子と目が合った。沈んだ栗色の髪を短めのセミロングにして、柔和で気弱そうな鳶色の大きな瞳が可愛い。まだ暑い時期だというのに、半袖の白いシャツの上から薄いライトブルーのベストを着ている。

尋春と目が合うと、彼女は顔を赤らめてそっぽを向いた。紅潮した陶器のような色の可愛らしい面差しを怪訝そうに見つめると、これまた怪訝そうな顔をした修吾が彼女の方を向いた。

「なーに尋ちゃん、女の子の方なんて見て。何い？ 高月ちゃんみ
たいなのがタイプなワケ？」

「ただ目が合ったただけだったの」

「もうっ尋ちゃん！ 隠さなくてもいいのよ別に。尋ちゃんも健全な男子高校……」

“尋ちゃん”を連呼する修吾に腹の立った尋春が襟首を掴もうとして、立ち上がった瞬間に教室前方のドアが大きな音を立てて開いた。同時に、全員の視線がドアに注がれる。

「あら」

紺色のピンで留められた青竹色の前髪を揺らして、左右異なった色を放つ瞳が尋春の方を向いた。

「あんたもココだったのね、クラス。サイッター」

挑発的な笑顔も偉そうな口調も、制服に包まれた線の細い身体も。尋春にとっては全て覚えがある。

「何でデメーこんなトコいんだよ！」

「緋月 南兎です。よろしくお願いします」

嫌味の無い快活な声でそう言うと、完全に悪意の断たれた爽やかな笑顔に戻る南兎。そんな彼女に見惚れている男子達を複雑な心境

で見回しながら、尋春はじとりと南兎の方を睨んだ。窓際の席から数えて三番目の列の最後部に位置している自分の方を、さつき目が合った高月という女の子が振り返って、南兎に唯一見惚れていない事を確かめてほっと胸を撫で下ろしているのも知らずに。

「それじゃ席はそこ、清家の隣ね」
「はい」

颯爽とした足取りでクラス中の視線を浴びながら、尋春の隣に設けられた席に座る。澄ました顔で前だけを向いている南兎の方を、しばらく怪訝そうに見つめると尋春も前を向いた。

「騒いだりしたらぶっ飛ばすわよ」

南兎の呟きが耳に届くと、無性に悲しくなってきた溜め息が出た。

「清家君、大丈夫かなあ」

気が気ではない様子で尋春の方を窺う女の子、高月こうづき 姫沙きさが小さく呟くと、彼女の前の席に座っている強気そうな少女が後ろを向いた。

「まだウジウジしてたの？ 早く告白しなきゃいいのに」
「告白なんてできないってば！」
「だーから、いつまで経っても認識さえされないのよ？」

呆れたように言われて姫沙は顔を赤らめて下を向いた。そんな彼

女に、忠告するように少女は眉をしかめる。

「あんな可愛い転校生が来るとはね。少しは危機感持ちなさいよ？」
「分かってるよお……」

小さい声でそう言うと、姫沙はぎゅっとスカートの裾を握り締め
た。

Episode : 9 E L E C T R I C U S E R .

「緋月南兎は元気バリバリっつと。これで藍理先輩に会ってこいつをガラシヤにインストールしてもらえば、あたしの野望も実現可能というワケでっす」

快活な声で喋りながら。白衣を着たまま、華宮皐月はデスクチェアの上でコーヒー牛乳を一気に飲み干した。開けっ広げた窓からは冷たい風が吹き、その風に亜麻色の前髪を揺らされても眠そうに閉ざした瞼を開かない。

南兎の様子を確認してから三日経った現在。皐月は小型のUSBメモリを左手の指でつまみ上げ、蛍光灯の光が支配する研究室の片隅では「っ」と息を吐いた。

現在、この部屋には彼女一人。

「監視部も甘いよねえ。もうあたしがガラシヤにこいつをインストールしたと思ってる。制御機能^{リミッター}なんて生易しいもんつけてるワケねえじゃん、つての！ あははは！ インストールした瞬間から歯止めも利かない人間兵器決定じゃん！」
アイム・ヒューマンノイド

皐月は派手に笑い転げ、ひとしきり笑いの波を静めてからまたUSBメモリを見つめる。それと同時に、深みに集まった大河の水が如く、豊かにうねり猶予う水面を彷彿とさせる翠眼は静謐さを取り戻した。

「モンド先生」

薔薇のつばみの色に艶めく唇から、幼い頃から呼び続けてきた名が零れ落ちる。

「Je vous hais」

「何これえ？ 誰から？」

虹彩異色症の瞳をくりりと動かし、南兎は玄関に出迎えた藍理から手渡されたUSBメモリをつまみ上げた。

「研究所の華宮皐月ちゃんから。二、三日前に連絡あったのよ。で、今日うちに来てこれを南兎ちゃんにつて。挿入機能のプログラムが入ってるからインストールしてね、とさ」

「ああ、華宮ね。あいつの笑顔、めちゃくちゃ嫌味ったらしかったからよく覚えてる」

上等な革靴を脱いでから中に入ると、南兎はリビングに放置されていた尋春のノートパソコンを勝手に立ち上げた。パソコンが低い機動音を唸らせている間に、南兎はてきぱきと手慣れた様子で電極を内蔵したヘッドフォンを接続してから、もう一度USBメモリを見つめる。

「もうインストールするの？」

「つもりだったけどさあ……何のプログラムかさっぱり分かんないんだけど」

警戒するように南兎がばやくと、藍理はとびきりの笑顔でそのぼやきに答える。

「大丈夫。万が一危ない奴だったとしても、あたしがどうにかしてあげる。あたしはただの主婦になっちゃっても清家満春の妻だもん、あの人から教わったことはまだ覚えてるわよ、色々」と

にこにこと笑う藍理に胡散臭そうな目線を飛ばしながらも、南兎は少し躊躇いながらもUSBメモリをぐさりと挿入する。

「ELECTRIC USER……」

画面上に浮かび上がった文字を読み上げた瞬間。
南兎の意識はヘッドフォンを通じて、ガラシャの電脳からパソコ
ン側に吸い込まれた。サイバーフレン

小鳥のさえずりに似た電子音が交錯する、電子形成世界の中央。
南兎の存在自身を造り上げたその無機質な世界に、緑色に発光する
電子フォントが浮かび上がる。

INSTALL START.

皐月が出ていった研究室。彼女が座っていたデスクチェアが収められたスチール製の机の上に、硬い文字が整然と並ぶだけの味気ない文章を連ねたコピー用紙が放られている。

『正式名称——電気人間《ELECTRIC USER》。製作者、華宮皐月。』

電脳人間プログラム、緋月南兎のガラシャ専用のインストールプログラム名目で製作許可が下りる。

当プログラムが及ぼす緋月南兎及びガラシャへの影響（ごく一部と推察される）は下記に当たる。

- ・ 八億ボルト超の電流、電磁力の自由操作。
- ・ ハッキングシステムの強化及び外部から侵入した情報破壊プログラムの拒絶機能の構築。

違反プログラムとして、製作者である華宮皐月には処分命令を下すものとする』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5622g/>

電腦少女の破天荒

2010年10月10日07時10分発行